

中英語韻律分析

— grammatical template による繰返し技巧の解明 —

An Approach to the Meter of Middle English Alliterative Verse:

Grammetrical Templates as a Metrical Device

守屋 靖代 MORIYA, Yasuyo

● 国際基督教大学

International Christian University

 **Keywords** 中英語詩韻律, 頭韻詩と脚韻詩, 連語構造, 韻律と統語による分析

Middle English meter, alliterative verse vs. rhymed verse, word collocation, metrical-syntactic analysis

ABSTRACT

中英語頭韻詩研究には、最近の韻律論から新たな見地が開かれ文学的アプローチと言語学的アプローチの融合が見られるようになった。Cable, Turville-Petre, Duggan, Hanna等によって議論された中英語頭韻詩韻律の代表的研究を振り返り、21世紀になって発展を見たCole, Cornelius, Putter, Weiskott, Yakovlevらの議論を概観する。中英語期に隆盛を極めた頭韻詩と脚韻詩の比較から中英語頭韻詩韻律の解明には、頭韻だけでなく語順や語の組み合わせが重要な役割を果たすことから、音韻と統語の両面を捉えたBoggel, Wesling, Wexler, Wrayらの提唱するgrammetrical templateによる分析が有意義であることを提唱する。分析の一例として前半行と後半行が同じ等位接続詞 *and* で始まる場合の韻律構造と語の組み合わせについて検討する。

Middle English verse has been studied in relation to Old English verse. The recent scholarship has seen a merge of the literary approach and the linguistic approach. This essay first examines how to read ME verse, alliterative and rhymed, and how to postulate the metrical rule of the verse line. The second section introduces new perspectives for ME alliterative verse proposed by various scholars in the 21st century, including studies by Cole, Cornelius, Jefferson, Putter, Stokes, Weiskott, and Yakovlev. These new

perspectives suggest that for a comprehensive understanding of ME alliterative verse it is essential to analyze word collocations and their function within the metrical framework. As an example of such a study to examine the meter and syntax at the same time, the essay will observe the special features of the half-lines that start with the same coordinating conjunction *and*. The essay concludes that the idea of “grammetrical template” proposed by Boggel, Wesling, Wexler, and Wray is useful for revealing the complex realization of the alliterative meter in similar word combinations.

1. 脚韻詩および頭韻詩韻律の特徴

最初に用語について定義する。伝統的な ictus vs. non-ictus に始まり, stressed syllable vs. unstressed syllable, lift vs. dip, beat vs. offbeat というような用語が使われてきたが, 本稿では詩の行中で強勢節を形成すると考えられるシラブルを metrical stress (MS)¹ と呼ぶことにする。MS を形成するかどうかは, 語本来のストレスと韻律によって定められた行内でのポジションによる。分析する行の上に音韻要素を, 下に韻律要素を示す Attridge (1982, 1995) の分析法は両要素を一度にマークできるという利点を持つ²。

MS と弱勢節が一定のリズムを保ち詩の韻律を形成することは, 頭韻詩においても根幹を成すが, 頭韻技法を組み入れた詩が古英語期に盛んに作られた。中英語期に入ると頭韻の使い方も行の構造も古英語詩とはかなり異なる頭韻詩が中英語期 14 世紀, 15 世紀, 特に英国中西部において盛んに作られた。中英語頭韻詩は, 古英語詩とのつながりが前提とされ, Turville-Petre の著作 *The alliterative revival* (1977) のタイトルになっているように revival という名称が使われて来た。Weiskott (2013) によれば古いものの再来と考え revivals とするか, 古英語と中英語の間に頭韻詩が全く絶えた状況でなかったことを鑑み survivals とするか, 詩の伝統が一時死に果てた deaths とするか, 異なる考え方がある。しかし, Hanna (2008) は, このようなあざ名 (“sobriquet,” p. 488) の付け合いのように異なる用語に拘ることは, 頭韻の機能や使い方について一辺倒の理解しか示さず, 一度死んだ頭韻詩が神の摂理により復活したというようなメタファーは信憑性に欠けるとする。Weiskott (2013, pp. 456-457) の言うように, 実在の中英語話者に

確認することや作品を編み出した詩人や写字生の見解を直接読み聞きすることができない現代において, 詩人自身のオリジナルテキストや流布した写本すべてが現存するわけではなく, むしろ非常に限られた, 作品の多くはひとつの写本だけにのみ残り異なる写本との比較もできないという状況でどのような再構築が可能か, さまざまな困難がつきまとう。

予備知識なしに新たに詩を読み始める前, 特に声に出して読もうとする場合, どのように韻律を感じ取りどのようなリズムを各行に当てはめて読むかを検証する。英文学史の定番教科書である *The Norton Anthology Volume A: The Middle Ages* (Simpson & David, 2012) において, 14 世紀, 15 世紀の中英語作品として収録されたもののうち 5 作品, *Sir Gawain and the Green Knight*, *Piers the Plowman*, *Confessio Amantis*, *The Canterbury Tales*, *My Compleinte* の冒頭部分を比較する。声に出して読むためには, 英語の音韻, 強弱音節, イントネーション, リズム, シラブル構造等を理解していなければならないが, その知識だけあればよいというわけではない。語の羅列をフレーズにまとめたり, MS を形成するシラブルとしないシラブルに識別するルールを知っておかなくてはならない³。韻律研究では, 文法カテゴリーによりストレスを持つ語と持たない語の区別をすることが一般的である。冠詞, 前置詞, 代名詞等の機能語は基本的にストレスを持たず, 他方基本的にストレスを持つとされる名詞, 動詞, 形容詞等の内容語と区別し分析する方法が伝統的であった。しかし, もうひとつの区分を加えないと韻律構造の解明ができないことが分かっている。すなわち第 3 のカテゴリーとして, 本来ストレスを持たない語が MS を形成する promotion や, 逆に内容語

からストレスが消える demotion, 元々がストレスを持っても持たなくてもどちらにもなり得る, すなわちコンテキストにより MS となることが可能なシラブルを含む語が存在し, そのような語が自然な発話にもさらには芸術としての詩のリズムにも影響を与えることを考慮しなくてはならないという英語独特のリズム形成の複雑さを考慮することが必要である。

例えば以下の中英語を代表する 5 つの詩を予備知識なしに初めて読もうとする時, それぞれ最初の約 20 行, *Sir Gawain* は第 1 スタンザの頭韻長行 14 行を引用したが, 最初は自然のストレス位置で読んだとしても, 読み進むうちに作品ごとのリズムが分かって来, このことが韻律理解の第一段階となる。最初の作品, John Gower の *Confessio Amantis* においてまず特徴と分かるのは, 2 行づつ脚韻を踏んでいるということと, 一行が 8 つのシラブルで成り立つということである。そう理解した上で読み進むと, *hem, us, that, is, we, might, such, for, all, shall, of* のような機能語が MS を成すよう promotion を取り入れながら読まなくては韻律を理解しているとは言えない, すなわち詩として享受することができないと分かって来る。このような脚韻を含む韻律は自然な語のアクセントに勝って前後の語との関係と行内でのポジションによってストレス位置が決まる構造になっている⁴。

CA P.1 Of hem that writen ous tofore
CA P.2 The bokes duelle, and we therfore
CA P.3 Ben tawht of that was write tho:
CA P.4 Forthi good is that we also
CA P.5 In oure tyme among ous hie
CA P.6 Do wryte of newe som matiere,
CA P.7 Essampled of these olde wyse
CA P.8 So that it myhte in such a wyse,
CA P.9 Whan we ben dede and elleswhere,
CA P.10 Beleve to the worldes eere
CA P.11 In tyme comende after this.
CA P.12 Bot for men sein, and soth it is,
CA P.13 That who that al of wisdom writ

CA P.14 It dulleth ofte a mannes wit
CA P.15 To him that schal it aldai rede,
CA P.16 For thilke cause, if that ye rede,
CA P.17 I wolde go the middel weie
CA P.18 And wryte a bok betwen the tweie,
CA P.19 Somwhat of lust, somewhat of lore,
CA P.20 That of the lasse or of the more

Geoffrey Chaucer の *The Canterbury Tales* においても *when, with, of, and*, 副詞語尾の *-ly, every, hem, they, in, on* 等に MS を認めなければならず, promotion が脚韻詩においては重要な韻律ルールとなっている。また, 脚韻のために *licour* (3 行目), *melodye* (9 行目), *pilgrimages* (12 行目) のようなストレスの置き方が求められていることも特徴である。ストレスの移動は本来のロマンス語アクセントによる場合もあり, ゲルマン語のアクセントが語頭から語尾に移される場合もある。

CT 1 Whan that aprill with his shoures soote
CT 2 The droghte of march hath perced to the roote,
CT 3 And bathed every veyne in swich licour
CT 4 Of which vertu engendred is the flour;
CT 5 Whan zephirus eek with his sweete breeth
CT 6 Inspired hath in every holt and heeth
CT 7 Tendre croppes, and the yonge sonne
CT 8 Hath in the ram his halve cours yronne,
CT 9 And smale foweles maken melodye,
CT 10 That slepen al the nyght with open ye
CT 11 (so priketh hem nature in hir corages);
CT 12 Thanne longen folk to goon on pilgrimages,
CT 13 And palmeres for to seken straunge strondes,
CT 14 To ferne halwes, kowthe in sondry londes;
CT 15 And specially from every shires ende
CT 16 Of engelond to caunterbury they wende,
CT 17 The hooly blisful martir for to seke,
CT 18 That hem hath holpen whan that they were seeke.
CT 19 Bifil that in that seson on a day,
CT 20 In southwerk at the tabard as I lay

Thomas Hoccleve による *My Complainte* において

も、最初は1行につきMSが4か5かで迷うかもしれないが、CTと同じような韻律と感じ取れば、*had, that, been, hem*等の機能語にストレスを置いて読むことになる。また脚韻の部分は *Mihelmésse* (2行目), *freisshenésse* (4行目), *gelownésse* (5行目) 等のように最後の *-nesse* にMSが置かれるというのが自然と思われる。

- MC 1 Aftir þat heruest inned had hise sheues,
 MC 2 And that the broun sesoun of Mihelmesse
 MC 3 Was come, and gan the trees robbe of her leues,
 MC 4 That grene had ben and in lusty freisshenesse,
 MC 5 And hem into colour of gelownesse
 MC 6 Had died and doun throwen vndirfoote,
 MC 7 That chaunge sanke into myn herte roote.
- MC 8 For freisshly brougte it to my remembraunce
 MC 9 That stablenesse in this worlde is ther noon
 MC 10 Ther is noping but chaunge and variaunce
 MC 11 Howe welthi a man be or wel begoon,
 MC 12 Endure it shal not. He shal it forgoon.
 MC 13 Deeth vndirfoote shal him þriste adoun
 MC 14 That is euery wigtes conclusioun,
- MC 15 Wiche for to weyue is in no mannes mygt,
 MC 16 Howe riche he be, stronge, lusty, freissh and gay
 MC 17 And in the ende of Nouembre, vppon a nigt,
 MC 18 Sigynge sore, as I in my bed lay,
 MC 19 For this and opir þoughtis wiche many a day,
 MC 20 Byforne, I tooke, sleep cam noon in myn ye,
 MC 21 So vexid me the þougthful maladie.

他方同時代の頭韻詩においては、本来ストレスを持たない語がMSを形成する promotion が起こるような例はあまりないが、それでも時として機能語が頭韻を踏んだり、MSの位置に登場することがあり、絶対的不変でなく、行中の位置、強勢節と弱勢節が一定のリズムで現れる期待感によって機能語であれ内容語であれストレスを持つ可能性が変化する独特のルールが適用されている。これは、音韻ルールと韻律ルールの両方で詩が成り立

つということであり、Weiskott (2015)⁵によればストレスを持つかどうかに変化する現象は古英語頭韻詩、初期中英語頭韻詩に既に見られ、14、15世紀の頭韻詩もこの区別に拠っている。

では、頭韻詩 *Sir Gawain and the Green Knight* はどのような韻律で書かれ、声に出して読むにはどのような知識が必要なのか。第1スタンザの頭韻部分は以下のである。各スタンザは頭韻詩部分の行数は異なるが、それぞれに bob, wheel と呼ばれる脚韻を踏んだ短い5行で閉じられる⁶。

- G 1 SIPEN þe sege and þe assaut watz sesed at Troye,
 G 2 þe borȝ brittened and brent to brondeȝ and askez,
 G 3 þe tulk þat þe trammes of tresoun þer wroȝt
 G 4 Watz tried for his tricherie, þe trewest on erthe:
 G 5 Hit watz Ennias þe athel, and his highe kynde,
 G 6 þat sipen depreced prouinces, and patrounes bicomē
 G 7 Welneȝe of al þe wele in þe west iles.
 G 8 Fro riche Romulus to Rome ricchis hym swyþe,
 G 9 With gret bobbaunce þat burȝe he biges vpon fyrst,
 G 10 And neuenes hit his aune nome, as hit now hat;
 G 11 Tirius to Tuskan and teldes bigynnes,
 G 12 Langaberde in Lumbardie lyftes vp homes,
 G 13 And fer ouer þe French flod Felix Brutus
 G 14 On mony bonkkes ful brode Bretayn he setteȝ

前述の脚韻詩とは異なり、頭韻音がMSの位置を示すことが多いので、まずは頭韻を探し出してその音から始まるシラブルにMSを持って来ようとする意識が働くと共に、最初の数行を読んでみて、頭韻音を含まない語や元来ストレスを持たない語は強く読まれることはあまりないようだとして理解できる。さらに、ある程度の行数を読み進むと、行ごとの頭韻を踏むシラブル数は3であることが多く、頭韻を踏むシラブルを a で、踏まないシラブルを x で表すと [aaax] のパターンが多いと分かって来る。その上で実際に声に出して読むと、3, 4, 5, 7, 11, 12, 14行目は自然な形で [aaax] の基本形で読むことができる (Putter, 1996, 2013; Putter & Jefferson, 2005; Russom, 2004; Turville-Petre, 1989)。しかし、他の行はいくつかの問題

を呈している。まず、2, 8, 13行目は頭韻を踏む語が4つ含まれており、冒頭行は最初 *sithen* という接続詞で始まっているが、頭韻が /s/ であるところから、4つの頭韻強勢節を認めることが可能かと感じられ、実際そのような読み方をする研究者もある⁷⁾。6行目にも *sithen* という接続詞が使われているが頭韻が /p/ であるところから、この行においてこの接続詞がMSを形成するとは考えにくい。この *sithen* のように、同じ語でも置かれたコンテクストにより異なるストレスを形成することがある。8行目も *riche* という形容詞が頭韻を踏んでいることから前半行に3つのMSを認める読み方が自然かもしれない。9, 10行目では、*gret*, *aune* という単シラブルの形容詞がMSとなり得るかという問題がある。先に掲げた3つの脚韻詩との違いは、頭韻詩では韻律が決めた枠組みよりも頭韻の位置と実際の語の組み合わせで行ごとの読み方が決まるということである。

もうひとつの頭韻詩代表作である *Piers the Plowman* の場合も基本一行が4つのMSで成り立ち、頭韻は [aaax] である行が多い (2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 13, 15, 18, 19, 20行目)。

PPB P.1⁸ In a somer seson, whan soft was the sonne,
 PPB P.2 I shope me in shroudes, as I a shepe were,
 PPB P.3 In habite as an heremite, vnholly of workes.
 PPB P.4 Went wyde in this world, wondres to here.
 PPB P.5 Ac on a May mornynge, on Maluerne hulle
 PPB P.6 Me byfel a ferly, of fairy me thou3te;
 PPB P.7 I was wery forwanded, and went me to reste
 PPB P.8 Vnder a brode banke, bi a bornes side,
 PPB P.9 And as I lay and lened, and loked on the wateres,
 PPB P.10 I slombred in a slepyng, it sweyued so merye.
 PPB P.11 Thanne gan I to meten, a merueilouse sweuene,
 PPB P.12 That I was in a wildernesse, wist I neuer where,
 PPB P.13 As I bihelde in-to the est, an heigh to the sonne,
 PPB P.14 I seigh a toure on a toft, trielich ymaked;
 PPB P.15 A depe dale binethe, a dongeon there-Inne,
 PPB P.16 With depe dyches & derke, and dredful of sight.
 PPB P.17 A faire felde ful of folke, fonde I there bytwene,
 PPB P.18 Of alle maner of men, the mene and the riche,

PPB P.19 Worchyng and wandryng, as the worlde asketh.
 PPB P.20 Some [putten] hem to the plow, played ful selde,

PPは、少なくとも最初の20行においては、SGGKよりは頭韻が揃っているが、いくつかの行は考察すべき現象を含んでいる。まず、頭韻を踏む語が4つ使われて前半行に3つのMSを認めるかと思われる行が4, 16, 17行目であり、14行目は *seigh* という頭韻を踏まない動詞をどう読むかが問題になる。1行目は /s/ で頭韻を踏む語4つが [aaaa] というパターンになっており、いきなり始まりから基本形より多い頭韻を踏むシラブル数になっている。11行目は頭韻音 /m/ を含む語が2つしかなく、内容語のどれがMSを形成するかを頭韻によって決定することができない部分が生じる。頭韻音からすると12行目の *was* はMSを形成するように見えるし、そうすると *was* という、頭韻詩ではふつうストレスを持たない語が頭韻を踏んでいるために強調されることになる。13行目の *into* と15行目の *binethe* (beneath) は、単独に発音された際に持つ2つめのシラブルのストレスを失うと考えられ、そうするとこの2行は頭韻については基本形であるが、*into*, *binethe* のところでストレスを持たないシラブルが続くことになる。

以上、中英語を代表する5作品について韻律を概観したが、頭韻詩と脚韻詩による違い、また頭韻詩の中でも共通する点と個々に特徴的な現象があることが分かる。

2. ME 韻律論—分析法と問題点

Cableの書評“Progress in Middle English Alliterative Metrics”(2009)は、Putter, Jefferson, & Stokesらによる著作、*Studies in the metre of alliterative verse* (2007)、およびYakovlevの博士論文“Development of the alliterative metre from Old to Middle English”の中英語頭韻詩研究を一緒に扱っている。この書評の中でCableは、中英語頭韻詩研究は未だに4つの問題の解明を見ていないと述べている。1. final -eの問題、2. MSを形成する品詞区分、3. 半行ごとのMSの数、4. 前半行と後半行の違いについて

ての問題である (pp. 243-244)。この4つは時代順に Borroff (1962), Salter (1966), Hieatt (1974), Pearsall (1981), Lawton (1982), Duggan (1986, 1988, 1990), Cable (1991), Cable & Wimsatt (1991), Minkova (2003) らが中心となって議論されて来たことであるが、ここで Cable がこの4つの問題を再度列挙していることは、最近の研究によっても完全な解明がなされていないことを示唆する。それを認めた上で Cable は、これらの複雑な課題は詳細な分析記述により解明が可能であり、そのためには “stressed syllables, unstressed syllables, and something else” (pp. 243-244) を考慮すべきだと主張している。Cable の評価によれば、Putter, Jefferson, & Stokes は前半行と後半行の非対称構造にルールを見出そうとし、Yakovlev はルールではなく優先順位で議論しているとする。Inoue & Stokes (2012) は前半行にも後半行同様2つのMSというルールがあり、一見3つに見える行は実際には2つで読める仕組みになっていることを証明する。これらの最近の研究から再確認できることは、Jefferson & Putter (2005) が author's prototype (p. 416) と呼ぶ元の基本形の解明とそこから許容される変化の限度を見極めることが韻律研究に求められているということである。Hamel (1984) が論じたように、特に同じ頭韻音が続く場合に、基本形からの逸脱が退屈な繰り返しを避ける積極的役割を担ったと考えれば、この逸脱の限度が頭韻詩としてある程度決まっているのか作品や詩人ごとに異なるのが問題となる。

Foot meter と呼ばれる *The Canterbury Tales*, *Confessio Amantis*, *My Compleinte* に見られるような脚韻詩韻律は頭韻詩に比べると安定したリズムによって成り立っているので、少々逸脱があってもすぐに元に戻る、ゆえに演繹的であると Cole (2010) は説明する。聞き手は韻律が守られていると感じ取れば promotion や demotion が起こってもそれを不自然とは思わない。その最たるものは nursery rhymes であると Cole は論じる。他方、古英語頭韻詩、中英語頭韻詩の韻律は帰納的であり、基本のルールはあっても実際のリズムには多様な変化があり、各行のMSの数も定まっていな

いようなケースがあり、行全体のシラブル数も変化に富む。聞き手にとっては次の行がどのような展開を見るかは “a rhythmical surprise” (Cole, 2010, p. 163) であり、韻律が言語に倣い歩み寄るのが頭韻詩のリズムである。脚韻詩が自然なリズムを人為的あるいは芸術的に韻律に埋め込むのに対し、頭韻詩はより自然な言語のリズムに拠っているので予測をたてることが難しい。これまで提唱された分析方法には利点も多いが、基本形からどのくらい逸脱するかを結論とすることが多かった。Weiskott (2013) がいみじくも言ったように、“One can only glean the shape of a verse form, not of composition or recitation. . . . One really wants a pattern of poetic transmission, a means of measuring archaism and innovation.” (pp. 456-457) という壁に突き当たる。

最近になって、Boggel (2009), Wesling (1996), Wray (2002) らの提唱する grammatical template を用い、音と文法(語順、連語)から解明を試みることが現象に即し、ある程度汎用性のあるルールを策定するのに有意義であるというアプローチが示された⁹。すなわち語彙レベルのストレス位置を先に決めるのではなく、詩全体の枠組み、隣り合う語との関係、句レベルでのMSの配置を考えた分析でなければ、少なくとも中英語頭韻詩韻律の客観的解明は難しいと思われる。Hanna も、頭韻詩の定まらないように思われる韻律は連語関係によって解明すべきとし、単一語でなく複数の語がグループを形成することで詩のリズムが成り立つのが頭韻詩独自の特徴であるという理由から語のレベルを超えた分析を推奨する (2008, p. 492)。コーパスを使う分析が増えたことも影響し、まずは用例をできる限り多く集めデータベースを作成して分析する研究が知られるようになった。文法上語と語のつながりには名詞の前には形容詞が付くことがよくあること、さらにその形容詞プラス名詞の前に来る品詞としては冠詞、前置詞の可能性が高い、というようなパターンがあって、そのユニットで韻律を解明するというアプローチである。

Esser (2009) は、まずデータを集め可能な語の

組み合わせをリストし、そこから主なパターンを抽出する手法を用いて formulaic expressions を解明することを提唱する。Formulaic theory は Parry (1971), Lord (2000) により定義され, Foley (1985), Hainsworth (1968), Whallon (1961, 1969) らの研究が知られるが、直接中英語頭韻詩に当てはめることを, Turville-Petre, Weiskott らは推奨しない。しかし、中英語頭韻詩において似通った語の組み合わせは繰返しの強い印象を与えるほど頻度が高く、その韻律構造も似通っていることから、韻律と統語の両方を考察することが最近言われるようになった。Formulaic expressions ではなく grammatical templates という用語を使うならば、口承文芸研究に端を発した繰返し技法を文字を前提とした中英語文学作品にも当てはめて考えることが可能である。すなわち、海を “swan-road” や “whale-road”, 王を “ring-giver” に置き換えるような古英語 kennings のような定型句を中英語頭韻詩にも認めようというのではなく、似通った語の組み合わせの繰返しに注目する¹⁰。Lawrence が提唱する “rhythmical-syntactical mould” (1966, p. 179) の解明を目指し、語レベルではなく句や場合によっては節を成す語群のユニットで分析を試みる。Schmitt & Carter (2004) が formulaic sequences と呼ぶこのようなパターンには様々な用語が用いられ未だ統一を見ていないが¹¹、用語は異なっているが、このような語のまとまりを分析することが多数の研究者によって進められている (Kamata, 1996; 鎌田, 2006; 田島, 2016)。

中英語頭韻詩は、頭韻の繰返しと共に古典文

学やゲルマンのリズムを思い出させるようなスタイルを形成している。単純な音の繰返しではなく音と意味が複雑に絡み合う構造を formulaicity と Wray は呼んで伝統的な formulas と区別し、それに基づく連語構造を formulaic sequence と称している¹²。Cronan (1986) によれば、頭韻を揃えるために formulaic sequences は有用であり、特に物語を語る場面においては、Boren (1977), Finlayson (1963), Harwood (1994), Holland (1973), Krishna (1982), Youmans (2009), Ziolkowski (1988) らの研究に見られるように、似通った構造の繰返しは重要な役割を果たす。このような観点から見直すと、同じ頭韻詩に区分されるものであっても、Schaefer が述べているように、古英語頭韻詩は traditionally poetic であるが、中英語頭韻詩は structurally poetic (2006, p. 192) であることが明らかになる。

3. 中英語頭韻詩の分析例 — 行頭の *and* と後半行冒頭の *and*

中英語頭韻詩を分析する一例として、中英語頭韻詩の行頭および後半行の冒頭に繰返し登場する語がどのような統語構造になっているかを調べること、grammatical templates を明らかにする。Oakden (1930, 1935), Duggan (1986), Hanna (1995), Smith (2009) らが指摘するように、後半行が MS の数や全体の構造において前半行より安定していることから、まず後半行の構造と語群の関係を分析する。扱う作品は中英語頭韻詩で主だった以下

<i>Cleanness</i> (C)	1,812 行
Excerpts from <i>The Destruction of Troy</i> (DT)	2,000 行
<i>Saint Erkenwald</i> (E)	352 行
<i>Sir Gawain and the Green Knight</i> (G)	2,025 行
Excerpts from <i>The Alliterative Morte Arthure</i> (MA)	1,992 行
<i>Patience</i> (P)	531 行
Excerpts from <i>Piers Plowman, B Text</i> (PPB)	1,941 行
<i>The Parlement of the Thre Ages</i> (P3A)	665 行
<i>The Siege of Jerusalem</i> (SJ)	1,334 行
Excerpts from <i>The Wars of Alexander</i> (WA)	2,004 行
<i>Wynnere and Wastoure</i> (WW)	503 行
計	15,159 行

の11編である¹³。

これら15,159行で後半行の冒頭に置かれる語を文法カテゴリーで分類すると表1のようになり、いちばん多いのが接続詞、弱勢シラブルが全くないすなわち2つの強勢シラブルが続く場合、前置詞、*determiner*と称される決定詞¹⁴となっており、この4つの構造による行が11,251行、全体の74%

表1 後半行の冒頭の要素とその頻度

接続詞	3,708行	24.5%
半行間の要素なし	3,184行	21.0%
前置詞	3,000行	19.8%
決定詞	1,359行	9.0%
<i>that</i>	1,228行	8.1%
代名詞	857行	5.6%
副詞	521行	3.4%
<i>to</i>	368行	2.4%
<i>be</i>	339行	2.2%
関係詞	226行	1.5%
動詞/助動詞	312行	2.1%
その他	57行	0.4%
計	15,159行	100.0%

を占める。

全体の4分の一にあたる接続詞が後半行の冒頭に登場する場合、等位接続詞、従属接続詞に分かれるが、等位接続詞の頻度は表2のとおりである。

表2 後半行の冒頭の等位接続詞とその頻度

<i>and</i>	1,857行	90.0%
<i>but</i>	70行	3.4%
<i>or</i>	69行	3.4%
<i>so</i>	29行	1.4%
<i>for</i>	25行	1.2%
<i>thus</i>	8行	0.4%
<i>yet</i>	5行	0.2%
計	2,063行	100.0%

後半行の冒頭に等位接続詞が置かれる場合、その90%が*and*となっている。そしてさらに、その

*and*に導かれて後半行に登場する品詞は表3のとおりである。

表3 *And*に導かれる後半行最初のMSを形成する語の種類とその頻度

動詞	643行	34.6%
名詞	618行	33.3%
形容詞	260行	14.0%
副詞	188行	10.1%
過去分詞	97行	5.2%
代名詞	21行	1.2%
現在分詞	19行	1.0%
その他	11行	0.6%
計	1,857行	100.0%

表3から、同じような頻度で、名詞と動詞が等位接続詞*and*に導かれて後半行に現れることが分かる。半行の間に*and*が置かれた場合、名詞あるいは動詞が後半行最初のMSを形成するとして、残りひとつのMS、頭韻の制約を受けない行末のMSはどのような品詞になっているか、後半行の構造は以下のパターンに分けられる。太字の品詞はそれがMSとなるシラブルを形成することを示す。ひとつの詩から1例ずつ引用した。

A=形容詞; N=名詞; P=前置詞; V=動詞; Z=副詞

(1) *and* A N

- C 1471 Casydoynes, and crysolytes, and clere rubies,
DT 841 þat I wilne of my wit and wilfull desyre.”
E 318 “I folwe þe in þe Fader nome and his fre Childes
G 2069 The brygge watz brayde down, and þe brode gatz
MA 3142 Bothe purpur and palle and precious stonys,
P 263 And also dryuen þurȝ þe depe and in derk walterez.
PPB 3.301 And swich pees among þe peple and a parfit truþe,
P3A 333 Bothe the see and the sonde and the sadde erthe,
SJ 658 Brosten þe britages and þe brode toures,
WA 1958 “I, sir Dari, þe deyne and derfe Emperoure,
WW 339 Roste with the riche sewes and the ryalle spyces,

(2) *and* A P N

- C* 273 Þose wern men mepelez and mazty on vrþe,
DT 537 Auntru in armes, and able of person;
E 245 And for I was ryȝtwis and reken and redy of
 þe laghe,
G 847 Felle face as þe fyre, and fre of hys speche;
MA 3300 ‘The fourte was a faire man and forsesy in armes,
P 353 Hit watz a ceté ful syde and selly of brede;
PPB P.16 Wiþ depe diches and derke and dredfulle of
 sizte.
P3A 320 Þat was rialeste of araye and rycheeste vndir the
 heuen.
SJ 149 Þe laste man was vnlele and luper of his dedis,
WA 1608 Þe wildire of all þe werde and worthist on erthe,
WW 119 What! he was yongeste of yeris and yapeste of
 witt

(3) *and* N A

- C* 4 And in þe contraré kark and combraunce huge.
DT 325 Mony Knightes in his courtte and company grete.
E 89 And als freshe hym þe face and the flesh nakyd
G 1655 As coundutes of Krystmasse and carolez newe,
MA 531 Bathe be chauncez of armes and cheuallrye noble,
P 264 Lorde, colde watz his cumfort, and his care huge,
PPB P.219 Baksteres and brewesteres and bochiers manye,
P3A 254 With coundythes and carolles and compaynyes
 sere,
SJ 861 ‘‘For or þis toun be tak and þis toures heye
WA 357 Face to face all his fourme and his effecte clene.
WW 409 That are had lordes in londe and ladyes riche,

(4) *and* N N

- C* 1300 Þe pruddest of þe prouince, and prophetes childer,
DT 1395 Þat was cumly and clene and a kinges daughter,
E 325 Now herid be þou, hegh God, and þi hende
 Moder,
G 1886 With comlych caroles and alle kynnes joye,
MA 490 As of þe sounde of þe see and Sandwyche belles!
P (No example)
PPB 2.114 By sizte of Sire Symonie and Cyuyles leuee.
P3A 590 And with his ewe ardaunt and arsneke pouders,
SJ 261 Þis whyle Nero hadde noye, and non nyȝtes
 reste,
WA 1771 A hatt and a hand-ball and a herne-panne;
WW (No example)

(5) *and* N P N

- C* 1614 A prophete of þat prouince and pryce of þe
 worlde.
DT 801 As with sacrifice to shew and seruice to goddes,
E 143 Þe maire with mony mazti men and macers
 before hym;
G 1541 And towche þe temez of tyxt and talez of
 armez
MA 2785 Þat was Raynalde of þe Rodes and rebell to
 Criste–
P (No example)
PPB 5.313 Sire Piers of Pridie and Pernele of Flaundres,
P3A 302 With Menylawse þe mody kynge and men
 out of Grece,
SJ 507 Boþe þe myȝt and þe mayn, [and] maist[rie]
 o[n] e[rþe],
WA 1151 Tildid full of turestis and toures of defence,
WW 51 Harde hattes appon hedes and helmys with
 crestys;

(6) *and* N V

- C* 496 How þat watterez wern woned and þe worlde
 dried.
DT 1079 Wen the derke was done and the day sprange,
E 323 And one felle on his face, and þe freke syked;
G 11 Ticius to Tuskan and teldes bigynnes,
MA 1770 Kaghte hym a couerde horse and his course
 haldez,
P 152 Þe coge of þe colde water, and þenne þe cry
 ryses.
PPB 3.150 Prouendrep persones and preestes she maynteneþ
P3A 353 And than Sir Cassamus thaym kepide, and
 the kyng prayede
SJ 1158 Tyen out of þe toun and Tytus bysecheþ,
WA 640 Þat al to-brest wald þe bordis and þe blode
 folowe.
WW 213 The kynge waytted one wyde, and the wyne
 askes;

(7) *and* N Z

- C* 1275 Pay caȝt away þat condelstik, and þe crowne als
DT 1775 Wisest of wordes and willé þerto.
E 305 My soule may sitte þer in sorow and sike ful
 colde,
G 722 Boþe wyth bullez and berez, and borez operquyle,
MA 44 Of Nauerne and Norwayne and Normaundy
 eke,
P 273 And þer he festnes þe fete and fathmez aboute,

- PPB 2.84 And þe erldom of Enuye and [Ire] togideres,
P3A 605 Bothe with kynges and knyghtis and kayzers
ther-inn.
SJ 895 Petr apostlen prince and seint Poule [also],
WA 1959 þe kyng of kyngis I am callid and conquirour
bathe,
WW 317 That alle schent were those schalkes and
Scharshull itwiste,

(8) *and* V N

- C 1097 Alle called on þat Cortayse and claymed His
grace.
DT 507 And obeit the bolde, and bowet hir fader;
E 317 And cast vpon þi faire cors and carpe þes
wordes:
G 2407 ‘Nay forsoþe,’ quop þe segge, and sesed hys
helme
MA 3220 Of he slynges with sleghte and slakes gyrdill,
P 4 For ho quelles vche a qued and quenches malyce;
PPB 5.362 Thanne waked he of his wynkyng and wiped
his eigen;
P3A 50 Bot gnattes gretely me greuede and gnewen
myn eghne;
SJ 993 And þou schalt ride to Rome, and receyue þe
croune,
WA 1997 Tastis þam vndire his tute and talkis þir wordis:
WW 257 For if thou wydwhare scholde walke and
waytten the sothe,

(9) *and* V P N

- C 389 Summe styge to a stud and stared to þe heuen,
DT 1210 Bare don mony bolde and brittonede to dethe;
E 297 3e were entouchid with his teche and take in
þe glotte,
G 1215 For I zelde me zederly and zege after grace;
MA 1301 Reght as þey hade weschen and went to þe
table.
P 368 Pat al chaunged her chere and chylled at þe hert.
PPB P.9 And as I lay and lenede and lokod on þe watres,
P3A 81 I slitte hym full sleghely and slyppede in my
fyngere,
SJ 761 He strideþ on a stif stede and strikeþ ouer þe
bente,
WA 123 Þen takis to him tresour and trusses in baggis,
WW 15 Schall wedde ladyes in londe and lede hem
at will,

(10) *and* V Z

- C 949 And þay wropely vpwafte and wrastled togeder,
DT 1369 But all left in hor loges and lurkit away.
E 61 Laddes laften hor werke and lepen þiderwardes,
G 435 Steppez into stel-bawe and strydez alofte,
MA 1976 Trussen full traystely, and treunt thereafteyre;
P 89 Þenne he rysez radly and raykes bilyue,
PPB 1.96 And taken transgressores and tyen hem faste
P3A 116 He streghte hym in his sterapis and stode vp-
rightes;
SJ 735 Bot walwyþ and wyndiþ and waltreþ a-boute,
WA 760 And þar-to tuke vp þaire trouthis and twyned
esondre.
WW 109 He dothe hym doun one the bonke, and
dwellys awhile

(11) *and* Z V

- C 907 For we schal tyne þis toun and trayþely disstrye,
DT 1308 Henttes his horne and hastily blawes;
E 127 An ansuare of þe Holy Goste, and afterwarde
hit dawid.
G 1335 Þay gryped to þe gargulun and grayþely
departed
MA 4082 And thus he fittis his folke and freschely askryes,
P 74 Al he wrathed in his wyt, and wyþerly he þoȝt:
PPB 1.179 For þouȝ ye be trewe of youre tonge and
treweliche wyne,
P3A 172 And pleynede hym one paramours and
peteuosely syghede.
SJ 1194 Leyþ a ladder to þe wal and alofte clymyþ,
WA 963 Brusches doune by þe berne and bitterly wepis.
WW 130 For this es the usage here and ever schall worthe:

11のパターンだけをリストすると以下のようになる。

(1)	<i>and</i>	A		N
(2)	<i>and</i>	A	P	N
(3)	<i>and</i>	N		A
(4)	<i>and</i>	N		N
(5)	<i>and</i>	N	P	N
(6)	<i>and</i>	N		V
(7)	<i>and</i>	N		Z
(8)	<i>and</i>	V		N
(9)	<i>and</i>	V	P	N
(10)	<i>and</i>	V		Z
(11)	<i>and</i>	Z		V

(1)から(5)のパターンは後半行が名詞句を形成し、(6)、(8)、(9)、(10)、(11)は動詞句を形成していることを示す。(7)だけは名詞に副詞が続くので、その構造は前半行を含めた行全体で決まることになる。よって、*and*に導かれる後半行は、名詞に続く動詞あるいは動詞に続く名詞の組み合わせで2つのMSを成すという *grammetrical templates* が明らかになる。

前半行は後半行ほどMS同士のつながりが強くなく、語の組み合わせがかなり自由になっている。しかし、各行がどのように始まるかを調べれば、最初のMSの前にどのようなシラブルがいくつ置かれるかが明らかになる。前半行は比較的自由な構造とされるが*and*で始まる、すなわち行全体が*and*で始まる場合が多いことから、この等位接続詞の使い方は行頭でも特別な機能を持つのではと考えられる。*And*で始まる行の頻度は表4のとおりである。*And*で始まる行は11作品で平均20%くらいであるが、少ないものは*MA*や*SJ*の10%前後、

表4 11作品における *and* で始まる行数とその頻度

<i>C</i>	341/1,812	18.8%
<i>DT</i>	296/2,045	14.5%
<i>E</i>	56/352	15.9%
<i>G</i>	360/2,025	17.8%
<i>MA</i>	430/4,345	9.9%
<i>P</i>	78/531	14.7%
<i>PPB</i>	527/2,003	26.3%
<i>P3A</i>	257/665	38.6%
<i>SJ</i>	137/1,334	10.3%
<i>WA</i>	329/2,004	16.4%
<i>WW</i>	64/503	12.7%

多いものは*PP*の25%を超える頻度になっており、*P3A*の40%近い頻度は群を抜いている。

以下に11の作品に登場する最初の2例ずつを引用する。

<i>C</i> 2	<i>And</i> rekken vp alle þe resounz þat ho by riȝt askez,
<i>C</i> 4	<i>And</i> in þe contraré kark and combraunce huge.
<i>DT</i> 4	<i>And</i> wysshe me with wyt þis werke for to end!
<i>DT</i> 6	<i>And</i> slydyn vppon shlepe by slomeryng of Age:

<i>E</i> 10	<i>And</i> peruertyd all þe pepul þat in þat place dwellid;
<i>E</i> 14	<i>And</i> conuertyd all þe communnates to Cristendame newe,
<i>G</i> 10	<i>And</i> neuenes hit his aune nome, as hit now hat;
<i>G</i> 13	<i>And</i> fer ouer þe French flod, Felix Brutus
<i>MA</i> 2	<i>And</i> the precyous prayere of Hys prys modyr
<i>MA</i> 4	<i>And</i> gyffe vs grace to gye and gouerne vs here
<i>P</i> 6	<i>And</i> quo for þro may noȝt þole, þe þikker he sufferes.
<i>P</i> 33	<i>And</i> þenne Dame Pes, and Pacyence put in þerafter.
<i>PPB</i> P.9	<i>And</i> as I lay and lenede and loked on þe watres,
<i>PPB</i> P.22	<i>And</i> wonnen þat pise wastours wip glotonye destruyep.
<i>P3A</i> 2	<i>And</i> the sesone of somere when softe bene the wedres,
<i>P3A</i> 6	<i>And</i> as Dryghtyn the day droue frome þe heuen,
<i>SJ</i> 4	<i>And</i> ȝewen iustice also, in Judeus londis.
<i>SJ</i> 34	<i>And</i> Waspasian was caled þe waspene bees after.
<i>WA</i> 6	<i>And</i> sum has langing of lufe lays to herken,
<i>WA</i> 12	<i>And</i> sum of wanton werkis þa þat ere wild-hedid;
<i>WW</i> 13	<i>And</i> hares appon herthe-stones schall hurcle in hire fourme,
<i>WW</i> 14	<i>And</i> eke boyes of blode with boste and with pryde,

表4 から以下のことが明らかになる。

1. 過剰な繰り返しを好み、formula 的な言い回しが戦いやドラマチックな場面で頻繁に登場する*MA*には*and*で始まる行が11作品の中で最も少ない。*MA*には他の繰返し技法が使われ、他の作品より繰返しの印象が強いが、行頭の*and*でたたみかける技法は他作品ほどには使われていない。
2. *P3A*の*and*で始まる行の多さは突出している。*P3A*は2つの写本が現存するが、Thornton MS (Thornton, BM Additional MS. 31042) において38.6%、Ware MS (Ware, BM Additional MS. 33994) において39.0%の行が*and*で始まる。この頻度の高さはこの作品がナラティブの性格を強く持つことを意味する。
3. *P3A*を除くと残りの10作品において*and*で始まる行は15%ほどになる。この頻度はナラティブで使われる追記加筆の技法とみなし得る頻度なのか、同時期の脚韻詩との比較などにより検証が可能ではないか。

4. *PPB*が*and*で始まるのは26.3%で、*P3A*について高い頻度であるが、ラテン語が混じり、他の作品とは韻律構造や語彙も異なる*PPB*がこのような技法を使っていることは、詩人Langlandの想定していた頭韻詩韻律が他の頭韻詩の韻律と異なるひとつの特徴を表している。

*P3A*における*and*で始まる行が最も多い行数で

連続する場面は544行目から554行目であるが、その前後も543行目と555行目を境に*and*で始まる行が固まっており、538行目から559行目までの計20行が*and*で始まっている。動詞をイタリックで示したが、登場人物の動きを表す動詞が多いことから、物語が盛り上がる場面で行頭の*and*が繰り返されていることが分かる。

<i>P3A 538</i>	<u>And</u> Cherlemayne, oure chefe kyng, <i>cheses</i> in-to the burgh,	(go)
<i>P3A 539</i>	<u>And</u> Dame Nioles anone he <i>name</i> to hym-seluen,	(take)
<i>P3A 540</i>	<u>And</u> <i>maried</i> hir to Maundevely þat scho hade myche <i>louede</i> ;	(marry, love)
<i>P3A 541</i>	<u>And</u> <i>spedd</i> hym in-to hethyn Spayne spedely there-aftire,	(hasten)
<i>P3A 542</i>	<u>And</u> <i>fittilled</i> hym by Flagott faire for to <i>loge</i> .	(prepare, dwell)
<hr/>		
<i>P3A 544</i>	<u>And</u> <i>faughte</i> with Sir Ferambrace and <i>fonge</i> hym one were;	(fight, take captive)
<i>P3A 545</i>	<u>And</u> than they <i>fologhed</i> hym in a fonte, and Florence hym <i>callede</i> .	(baptize, call)
<i>P3A 546</i>	<u>And</u> than <i>moued</i> he hym to Mawltriple Sir Balame to <i>seche</i> ,	(betake, seek)
<i>P3A 547</i>	<u>And</u> that Emperour at Egremorte aftir he <i>takes</i> ,	(capture)
<i>P3A 548</i>	<u>And</u> wolde hafe <i>made</i> Sir Balame a man of oure faythe;	(make)
<i>P3A 549</i>	<u>And</u> <i>garte</i> <i>feche</i> forthe a founte by-fore-with his eghne,	(cause, bring)
<i>P3A 550</i>	<u>And</u> he <i>dispysede</i> it and <i>spitte</i> and <i>spournede</i> it to the erthe,	(disperse, spit, kick)
<i>P3A 551</i>	<u>And</u> one swyftely with a swerde <i>swapped</i> of his hede;	(strike)
<i>P3A 552</i>	<u>And</u> Dame Floripe þe faire was <i>cristened</i> there-aftire,	(christen)
<i>P3A 553</i>	<u>And</u> <i>kende</i> thaym to the Corownne þat Criste <i>had</i> one hede,	(guide, have)
<i>P3A 554</i>	<u>And</u> the <i>nayles</i> , anone, naytly there-aftire,	
<hr/>		
<i>P3A 556</i>	<u>And</u> than those Relikes so riche redely he <i>takes</i> ,	(take)
<i>P3A 557</i>	<u>And</u> at Sayne Denys he thaym <i>dide</i> , and <i>duellyd</i> there for euer.	(place, dwell)
<i>P3A 558</i>	<u>And</u> than bodworde vn-to Merchill full boldly he <i>sendys</i> ,	(send)
<i>P3A 559</i>	<u>And</u> <i>bade</i> hym Cristyne <i>hy-come</i> and one Criste <i>leue</i> ,	(command, become, believe)

OEDは、このような*and*をSense 11.a.において以下のように定義している。

11. Continuing the narration.

a. Continuing a narration from a previous sentence, expressed or understood. Also standing alone as a question: ‘And so?’, ‘And what then?’.

この意味の用例として*Anglo-Saxon Chronicles*, Chaucer, Caxton, The King James BibleからR. Dahlまでが引用されており、これらは古英語以来ナラティブにおいてこのような機能を持つ*and*が途切れることなく使われていることを示している。

Longman Grammar of Spoken and Written English (Biber, Conrad, & Leech, 1999)によれば、*and*で語や句、節をつなげることは、物語を語る際add-

on strategy (pp. 1068-1079) の機能を果たす。*And*で次の発話を繋げばそこで息継ぎをすることが可能であり、物語の緊張感を保持することができる。同様のことを、Meurman-Solinは以下のように説明する。“utterance-initial connectives, such as *and*, have a significant role in marking utterance boundaries and indicating the intended reading of the succeeding utterance.” (2012, p. 190) 行頭の*and*はFreeborn (1996) や *Longman Grammar of Spoken and Written English*の言う narrative speechの技法として詩全体に効果を持ち、後半行の冒頭に置かれる*and*はそれに続く後半行の構造を特定のパターンで統一する機能を持つことが分かる。

4. 結論

繰り返し登場する grammatical templatesの分析から、中英語頭韻詩は逐語的繰り返し (verbatim repetition)ではなく、さまざまな変種を含み構成要素も変化に富むものであることが分かる。各行におけるMSの位置と弱音節への変化、半行構造、また各作品に特異な現象の分析も重要であるし、中英語のシラブル構造、schwaの役割、final-eの問題、現存テキストの制約など時空の制限も常に考慮しなくてはならないが、語と語のつながりを単位とする分析もまた中英語頭韻詩の理解を助けるものとなるのではないか。Hannaはこれまでまず解明すべきとされてきた頭韻の数や構造、半行ごとのMSの成立ちなどによる詳細な分析は“the futility of ‘Old Historicist’ formulations” (2008, p. 492)として批判的に見る。確かに韻律研究は先に枠組みを決めてそれに当てはまらないものをどう説明できるか、説明の効率がよいものがある研究とされるprescriptivismに陥る危険性があり、研究者間の議論がprescriptiveであるという点で批判されることも多い。Hannaの以下の嘆きは極めて妥当である。“To believe, as do ‘Old Historicist’ scholars, with their interests in butchering Middle English literature into consumable steaks and roasts, in an antithesis between alliterative poetry and other forms of medieval literary endeavour strains the

evidence.” (2008, p. 498) 中世英語を読みこなし、細かい分析を一貫して行うことはたやすいことではない。中世英語の詩人たちが想定していた枠組みやルールを明らかにするためには、データベースを作り、時間のかかる分析を続けるしかなく、たとえそれが肉を切り刻んで台無しにする作業と揶揄されようと、そのことを覚えつつ切り刻むプロセスを経て全体像の再構築を試みるしかない。語レベルの音韻による韻律研究から統語を組み入れた韻律研究への進展が中世英語研究に新たな展開をもたらしているのは、これまでのそのような研究成果と批判があつてのことである¹⁵。

注

- 1 MSについてはFabb (2002, pp. 1-56) に詳しく説明されている。
- 2 Attridge (1982, 1995) は英詩韻律研究に新たな展開をもたらした。Fabb (2002) はAttridgeの分析方法が有益であることを検証し詳細な議論を述べている。Fabb & Halle (2008) も参照。
- 3 Crystal & Quirk (1964) は言語芸術を分析するための10のパラ言語をリストしているが、その10に含まれるものは、tone, tempo, prominence, pitch range, rhythmicity, tension, quality, qualification, pause, vocalizationである。
- 4 Cable (2009, p. 259) は、行内だけでなく行末におけるストレスの置き方が脚韻詩と頭韻詩で全く異なることを引いて、韻律の違いを説明している。
- 5 In order to scan Middle English alliterative verse, one needs a way to map words onto lifts and dips. Metrists generally attribute the stress assignment of alliterative poetry to grammatical category membership. A broad distinction obtains between function words (articles, prepositions, pronouns, etc.), which typically do not receive metrical stress, and content words (nouns, adjectives, lexical adverbs, etc.) which typically do. . . . Despite the growing artificiality of the prosodic hierarchy, Old English poetry and Early Middle English alliterative poetry relied on the same broad distinction between function words and content words. Thus the prosodic hierarchy of fourteenth-century alliterative poetry appears to have been inherited from earlier iterations of alliterative metre. (Weiskott, 2015, pp. 154-155)
Weiskottの機能語と内容語の区別の中に動詞は含まれておらず、それが意図的であるか特に説明はない。このことは韻律研究において動詞の扱いが

- さまざまな問題を含んでおり、機能語と内容語の二分法が完璧ではないことを示唆する。
- 6 Bob, wheelは韻律上さまざまな特徴を持つ。Putter (2015)を参照。
 - 7 2行目のMSは, bor3, brittened, brent, brondez, askezに認めることができるが、最初のbor3はbrittened, brent, brondezと異なりbr-で始まっていない。中英語頭韻詩においては古英語と異なり同一の子音で始まっていれば、14行目のようにb-とbr-は頭韻を踏むとみなされる。2行目のbor3にMSを認めるかどうかは議論が分かれるところであるが、認めればこの行には4つの頭韻を含むシラブルがあるということになる。bor3にMSを認めなければこの行は[aaax]の頭韻パターンとなる。
 - 8 PPは中英語頭韻詩では50以上の写本に3つのテキストA, B, Cが残っており比較が可能という特徴を持つ。このことは同時代のCT同様、広く好まれて流布したことを示唆する。PPの後のBは、Bテキストの引用であることを示す。また、中英語頭韻詩のほとんどは著者名が分かっていないが、その中でPPはWilliam Langlandがその作者と分かっている。
 - 9 同様の分析を60年代にWexler (1966) が議論している。
 - 10 古英語の定型句には以下のようなものが知られ, kenningsと呼ばれる (Cassidy & Ringler, 1971, pp. 266-272). *rodoros candel* "candle of the sky" (the sun); *beadoléoma* "battle flame" (sword)
 - 11 Wrayのリストは以下のとおり。amalgams; automatic; chunks; clichés; co-ordinate constructions; collocations; complex lexemes; composites; conventionalized forms; F[ixed] E[xpressions] including I[dioms]; fixed expressions; formulaic language; formulaic speech; formulas/formulae; fossilized forms; frozen metaphors; frozen phrases; gambits; gestalt; holistic; holophrases; idiomatic; idioms; irregular; lexical simplex; lexical (ized) phrases; lexicalized sentence stems; listemes; multiword items/units; multiword lexical phenomena; noncompositional; noncomputational; nonproductive; nonpropositional; petrifications, phrasemes; praxons; preassembled speech; precoded conventionalized routines; prefabricated routines and patterns; ready-made expressions; ready-made utterances; recurring utterances; rote; routine formulae; schemata; semipreconstructed phrases that constitute single choices; sentence builders; set phrases; stable and familiar expressions with specialized subsenses; stereotyped phrases; stereotypes; stock utterances; synthetic; unanalyzed chunks of speech; unanalyzed multiword chunks; units (2002, p. 9)
 - 12 用語は異なるが, Camargo (1987), Finlayson (1963), Holland (1973), Johnson (1978), Krishna (1982), Lawrence (1970), Schaefer (1996), Vaughan (1979), Waldron (1957), Wilson (1971)らの研究も中英語における formulaic sequencesを解明している。
 - 13 分析に使用したテキストは以下のとおり。*The Destruction of Troy (DT): The 'Gest Hystoriale' of the Destruction of Troy*. Eds. G. A. Panton & D. Donaldson. EETS. London: Oxford University Press, 1968; *Cleanness (C): The poems of the Pearl Manuscript*. Eds. Malcolm Andrew & Ronald Waldron. Exeter: University of Exeter, 1987; *St. Erkenwald (E): Alliterative poetry of the later middle ages: An anthology*. Ed. Thorlac Turville-Petre. London: Routledge, 1989; *Sir Gawain and the Green Knight (G): The poems of the Pearl Manuscript*. Eds. Malcolm Andrew & Ronald Waldron. Exeter: University of Exeter, 1987; *The Alliterative Morte Arthure (MA): Morte Arthure: A critical edition*. Ed. Mary Hamel. New York: Garland, 1984; *Patience (P): The poems of the Pearl Manuscript*. Eds. Malcolm Andrew & Ronald Waldron. Exeter: University of Exeter, 1987; *Piers Plowman B-Text (PPB): A parallel-text edition of the A, B, C and Z versions*. Ed. A. V. C. Schmidt. London: Longman, 1995; *The Parlement of the Thre Ages (P3A): The Parlement of the Thre Ages*. Ed. M. Y. Offord. EETS. London: Oxford University Press, 1967; *The Siege of Jerusalem (SJ): The Siege of Jerusalem*. Eds. E. Kölbing & Mabel Day. Millwood, NY: Kraus Reprint, 1988; *The Wars of Alexander (WA): The Wars of Alexander*. Ed. Walter W. Skeat. Millwood, NY: Kraus Reprint, 1990; *Wynne and Wastoure (WW): Wynne and Wastoure and the Parlement of the Thre Ages*. Ed. Warren Ginsberg. Kalamazoo: Medieval Institute, 1992.
 - 14 決定詞には以下のものが含まれる。決定詞の語例と文法的機能についてはBallard (2013, pp. 39-42)を参照。Articles (definite articles and indefinite articles), possessive determiners, wh-determiners, indefinite determiners, demonstrative determiners, numerals (Ballard, 2013, p. 40)
 - 15 中英語韻律研究の伝統に基づきながら新たな見地を開いているWeiskott (2016), Yakovlev (2009a, 2009b)らの研究は時代区分より詩の技法そのものから頭韻詩の発展を明らかにしており、更なる解明が期待される。

引用文献

Attridge, D. (1982). *The rhythms of English poetry*. London: Longman.

Attridge, D. (1995). *Poetic rhythm: An introduction*.

- Cambridge: Cambridge University Press.
- Ballard, K. (2013). *The frameworks of English*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Biber, D., Conrad, S., & Leech, G. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson Education.
- Boggel, S. (2009). *Metadiscourse in Middle English and Early Modern English religious texts: A corpus-based study*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Boren, J. (1977). Narrative design in the *Alliterative Morte Arthure*. *Philological Quarterly*, 56, 310-319.
- Borroff, M. (1962). *Sir Gawain and the Green Knight: A stylistic and metrical study*. New Haven and London: Yale University Press.
- Cable, T. (1991). *The English alliterative tradition*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Cable, T. (2009). Progress in Middle English alliterative metrics. *Yearbook of Langland Studies*, 23, 243-264.
- Cable, T., & Wimsatt, J. (1991). Introduction. In R. Baltzer, T. Cable, & J. Wimsatt (Eds.), *The union of words and music in medieval poetry* (pp. 1-14). Austin: University of Texas Press.
- Camargo, M. (1987). Oral tradition structure in *Sir Gawain and the Green Knight*. In J. Foley (Ed.), *Comparative research on oral traditions* (pp. 121-137). Columbus: Slavica.
- Cassidy, F., & Ringler, R. (Eds.). (1971). *Bright's Old English grammar and reader*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Cole, K. (2010). The Destruction of Troy's different rules: The alliterative revival and the alliterative tradition. *Journal of English and Germanic Philology*, 109, 162-176.
- Cornelius, I. (2015). The accentual paradigm in early English metrics. *Journal of English and Germanic Philology*, 114, 459-481.
- Cronan, D. (1986). Alliterative rank in Old English poetry. *Studia Neophilologica*, 58, 145-158.
- Crystal, D., & Quirk, R. (1964). *Systems of prosodic and paralinguistic features in English*. The Hague: Mouton.
- Duggan, H. (1986). The shape of the b-verse in Middle English alliterative poetry. *Speculum*, 61, 564-592.
- Duggan, H. (1988). Final -e and the rhythmic structure of the b-verse in Middle English alliterative poetry. *Modern Philology*, 86, 119-145.
- Duggan, H. (1990). Stress assignment in Middle English alliterative poetry. *Journal of English and Germanic Philology*, 89, 309-329.
- Esser, J. (2009). *Introduction to English text-linguistics*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Fabb, N. (2002). *Language and literary structure: The linguistic analysis of form in verse and narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fabb, N., & Halle, M. (2008). *Meter in poetry: A new theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Finlayson, J. (1963). Formulaic technique in *Morte Arthure*. *Anglia*, 81, 372-393.
- Foley, J. (1985). *Oral-formulaic theory and research: An introduction and annotated bibliography*. New York: Garland.
- Freeborn, D. (1996). *Style: Text analysis and linguistic criticism*. London: Macmillan.
- Hainsworth, J. (1968). *The flexibility of the Homeric formula*. Oxford: Clarendon.
- Hamel, M. (1984). *Morte Arthure: A critical edition*. New York: Garland.
- Hanna, R. (1995). Defining Middle English alliterative poetry. In M. Tavormina & R. Yeager (Eds.), *The endless knot: Essays on Old and Middle English in honor of Marie Borroff* (pp. 43-64). Cambridge: D. S. Brewer.
- Hanna, R. (2008). Alliterative poetry. In D. Wallace (Ed.), *The Cambridge history of medieval English literature* (pp. 488-512). Cambridge: Cambridge University Press.
- Harwood, B. (1994). The Alliterative *Morte Arthure* as a witness to epic. In M. Amodio & S. Miller (Eds.), *Oral poetics in Middle English poetry* (pp. 241-286). New York: Garland.
- Hieatt, C. (1974). The rhythm of the alliterative long line. In B. Rowland (Ed.), *Chaucer and Middle English studies in honour of Russell Hope Robbins* (pp. 119-130). London: Allen and Unwin.
- Holland, W. (1973). Formulaic diction and the descent of a Middle English romance. *Speculum*, 48, 89-109.
- Inoue, N., & Stokes, M. (2012). Restrictions on dip length in the alliterative line: The a-verse and the b-verse. *Yearbook of Langland Studies*, 26, 231-260.
- Jefferson, J., & Putter, A. (2005). Alliterative patterning in the *Morte Arthure*. *Studies in Philology*, 102, 415-433.
- Johnson, J. (1978). Formulaic thrift in the *Alliterative Morte Arthure*. *Medium Ævum*, 47, 255-261.
- Kamata, Y. (1996). Tradition or innovation?: An explanation of some formulas in the *Destruction of Troy*. *Bulletin of Sendai College*, 27, 75-87.
- 鎌田 幸雄 (2006). 頭韻伝統と脚韻伝統の間で—スタンザ形式の頭韻詩の文体的分析の試み— 仙台大学紀要, 38, 1-19.
- Krishna, V. (1982). Parataxis, formulaic density, and thrift in the *Alliterative Morte Arthure*. *Speculum*, 57, 63-83.
- Lawrence, R. (1966). The formulaic theory and its application to English alliterative poetry. In R. Fowler (Ed.), *Essays on style and language: Linguistic and critical approaches to literary style*

- (pp. 166-183). London: Routledge and K. Paul.
- Lawrence, R. (1970) Formula and rhythm in the *Wars of Alexander*. *English Studies*, 51, 97-112.
- Lawton, D. (1982). Middle English alliterative poetry: An introduction. In D. Lawton (Ed.), *Middle English alliterative poetry and its literary background: Seven essays* (pp. 1-19). Cambridge: Brewer.
- Lord, A. (2000). *The singer of tales*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Meurman-Solin, A. (2012). The connectives *and*, *for*, *but*, and *only* as clause and discourse type indicators in 16th- and 17th-century epistolary prose. In A. Meurman-Solin, M. López-Couso, & B. Los (Eds.), *Information structure and syntactic change in the history of English* (pp.164-196). Oxford: Oxford University Press.
- Minkova, D. (2003). *Alliteration and sound change in early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oakden, J. (1930, 1935). *Alliterative poetry in Middle English: The dialectal and metrical survey*. Manchester: Manchester University Press.
- The Oxford English Dictionary Online*. <http://www.oed.com/> (2017/7/24)
- Parry, M. (1971). *The making of Homeric verse: The collected papers of Milman Parry*. Oxford: Clarendon.
- Pearsall, D. (1981). The origins of the alliterative revival. In B. Levy & P. Szarmach (Eds.), *The alliterative tradition in the fourteenth century* (pp. 1-24). Kent: Kent State University Press.
- Putter, A. (1996). *An introduction to the Gawain-poet*. New York: Longman.
- Putter, A. (2013). A prototype theory of metrical stress: Lexical category and ictus in Langland, the Gawain poet and other alliterative poets. In R. Dance & L. Wright (Eds.), *The use and development of Middle English* (pp. 281-299). Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Putter, A. (2015). Adventures in the bob-and-wheel tradition: Narratives and manuscripts. In N. Perkins (Ed.), *Medieval romance and material culture* (pp. 147-163). Suffolk: Boydell and Brewer.
- Putter, A., & Jefferson, J. (2005). Alliterative patterning in the *Morte Arthure*. *Studies in Philology*, 102, 415-433.
- Putter, A., Jefferson, J., & Stokes, M. (2007). *Studies in the metre of alliterative verse*. Oxford: Society for the Study of Medieval Languages and Literature.
- Russom, G. (2004). The evolution of Middle English alliterative meter. In A. Curzan & K. Emmons (Eds.), *Studies in the history of the English language II: Unfolding conversations* (pp. 281-304). Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Salter, E. (1966). The alliterative revival. *Modern Philology*, 64, 146-150; 233-37.
- Schaefer, U. (1996). Twin collocations in the Early Middle English lives of the Katherine group. In H. Pitch (Ed.), *Orality and literacy in Early Middle English* (pp. 179-198). Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Schaefer, U. (2006). Textualizing the vernacular in late medieval England: Suggestions for some heuristic reconsideration. In A. Johnson, F. von Mengden, & S. Thim (Eds.), *Language and text: Current perspectives on English and Germanic historical linguistics and philology* (pp. 269-290). Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Schmitt, N., & Carter, R. (2004). Formulaic sequences in action: An introduction. In N. Schmitt (Ed.), *Formulaic sequences: Acquisition, processing and use* (pp. 1-22). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamin.
- Simpson, J., & David, A. (Eds.). (2012). *The Norton anthology of English literature, Volume A: The middle ages*. Ninth Edition. New York and London: Norton.
- Smith, J. (2009). The metre which does not measure: The function of alliteration in Middle English alliterative poetry. In A. Putter & J. Jefferson (Eds.), *Approaches to the metres of alliterative verse* (pp. 11-23). Leeds: Leeds Studies in English.
- 田島 松二 (2016). 中英語における 'one the best (man)' 型構文 中英語の統語法と文体 東京: 南雲堂 pp. 117-143.
- Turville-Petre, T. (1977). *The alliterative revival*. Cambridge: D. S. Brewer and Totowa: Rowman Littlefield.
- Turville-Petre, T. (1989). *Alliterative poetry of the later middle ages: An anthology*. London: Routledge.
- Vaughan, M. (1979). Consecutive alliteration in Alliterative Morte. *Modern Philology*, 77, 1-9.
- Waldron, R. (1957). Oral-formulaic technique and Middle English alliterative poetry. *Speculum*, 32, 792-804.
- Weiskott, E. (2013). Phantom syllables in the English alliterative tradition. *Modern Philology*, 110, 441-458.
- Weiskott, E. (2015). Alliterative metre and the textual criticism of the Gawain group. *Yearbook of Langland Studies*, 29, 151-175
- Weiskott, E. (2016). *English alliterative verse: Poetic tradition and literary history*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wesling, D. (1996). *The scissors of meter: Grammetrics and reading*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Wexler, P. (1966). Distich and sentence in Corneille and Racine. In R. Fowler (Ed.), *Essays on style and language: Linguistic and critical approaches to literary style* (pp. 100-117). London: Routledge

- and Kegan Paul.
- Whallon, W. (1961). The diction of *Beowulf*. *Publication of Modern Language Association of America*, 76, 309-319.
- Whallon, W. (1969). *Formula, character and context: Studies in Homeric, Old English and Old Testament poetry*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wilson, P. (1971). Word play and the interpretation of *Pearl*. *Medium Ævum*, 40, 116-134.
- Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yakovlev, N. (2008). *Development of the alliterative metre from Old to Middle English* (Unpublished doctoral dissertation). University of Oxford, UK.
- Yakovlev, N. (2009a). On final –e in the b-verses of *Sir Gawain and the Green Knight*. In J. Jefferson & A. Putter (Eds.), *Approaches to the metres of alliterative verse* (pp. 135-157). Leeds: University of Leeds.
- Yakovlev, N. (2009b). Prosodic restrictions on the short dip in Late Middle English alliterative verse. *Yearbook of Langland Studies*, 23, 217-242.
- Youmans, G. (2009). 'For all this werlde ryche': Syntactic inversions as evidence for metrical principles in the *Alliterative Morte Arthure*. In J. Jefferson & A. Putter (Eds.), *Approaches to the metres of alliterative verse* (pp. 115-133). Leeds: University of Leeds.
- Ziolkowski, J. (1988). A narrative structure in the *Alliterative Morte Arthure* 1-1221 and 3150-4346. *Chaucer Review*, 22, 234-245.

